



蒼い大地



1

夏川 宙

蒼い大地

第一章 絶望の日本

1

「ちっ！ やはり、高性能マスクは品切れか！」

多橋が、怒気と強い無念さを滲ませた顔で、吐き捨てるように言った。妻からのEメールを、青いスマホで読んだのである。

高性能マスクは現在の日本において最も貴重な物で、特に、多橋にとっては喉から手が出るほど欲しい代物だ。

多橋は、無名だが優秀な、青年分子生物学者である。

スマホを荒っぽく助手席において、多橋は、白いハイブリッドカー、ニリウスのエンジンをかけ、渋谷区の路上パーキングエリアから車道に滑り込ませた。

目的地は、雲河病院。中学生の娘の見舞いだ。

15分ほどで、車は、それほど人通りの多くない比較的小さな商店街を通る、片道1車線の車道に入った。

蒼い大地

大学生らしき男が、ミュータントに突き飛ばされて電柱に激突し、苦しげに「ぐつ」と呻く。

残った2人が、短い格闘の末、なんとかミュータントを拘束した。

その時、渋滞の原因となっていたトラックが動きでもしたのであるうか、ニリウス前方の車列が動き始めた。

多橋は、しかめっ面でブレーキから足を離し、アクセルを軽く踏んだ。

2年前、西東京（東京）、宮崎（九州）、小樽（北海道）に存在する政府の極秘研究所、及び東葉大学（千葉）が所有する巨大粒子加速器の4施設が、同時に謎の大爆発を起こした。

同時多発テロ、国家的陰謀、政治的謀略、極めて低確率で発生する事故など、様々な可能性が考慮され大規模な調査が行われたが、いまだに爆発の原因は分かっていない。

この大爆発によって生じた損害の内、最も大きなものは施設の損壊・従業員の死傷ではなく、極秘研究所3つの爆発時に飛散し、現在もそれら3施設の残骸から発生し続けている有害化学物質、4202-β-zdである。

この有害化学物質は、気流によって広く日本全域に散布され、人々の健康を害している。

蒼い大地

そして極めて恐ろしいことに、この有害化学物質を一定量以上体内に取り込んだ人間は、高い確率で凶暴なミュータントとなってしまうのだ。

発熱・頭痛・腹痛・倦怠感などの前駆症状を発症した後ミュータント化するケースと、前駆症状無しにいきなりミュータント化するケースが存在する。

前駆症状が発症してからミュータント化するまでの期間は、現在までに確認されている例では、数日〜5ヶ月である。

ミュータント化、及びミュータントの身体構造・生態に関しては、分かっていることが多いが、ほぼ全ての場合、ミュータント化した人間は、目の位置が後退し、耳と鼻が削げた、ブルーのスーパーマッチョな怪物に転じ、筋力は3倍以上となり、記憶は完全に失われて極めて凶暴となる。

真偽は不明だが、レッドのミュータントや3つ目のミュータントも存在するという噂がある。

ミュータント化の機序に関しては、ほとんど分かっていない。

今のところ、「有害化学物質がDNAを損傷させ続け、DNA損傷がある程度のレベルに達するとミュータント化が起こるのではないか」と、考えられている。

このような状況なので、ミュータント化を抑制する方法もミュータント化した人間を元の人間に戻す方法も、研究は行われているが、完成の目処は全くついておらず、前途

蒼い大地

は多難すぎる状態だ。

4202-β-zdの粒子は極めて小さく、普通のマスクでは防御する事ができないため、高価な高性能マスクが飛ぶように売れた。

増産し、外国からの輸入量も増やしているが、己の身を守るため・ぼったくるため等の理由で買い占める者達も数多く存在し、又高性能マスクはそもそも消耗品であるが、日本国内における4202-β-zd濃度が高く高性能マスクが激しく消耗するため、高性能マスクは常に品薄状態だ。

多くの外国が、日本を危険地域に指定し、外人の姿が日本から消えた。

一部の日本人も、海外に脱出した。

極秘研究所は軍事関連施設であったため、事故時の状況・施設の損害・死傷した従業員名などの詳細は明らかにされていない。

軍事関連施設であれば、有害化学物質で日本全土を汚染した責任を誰もとる必要が無いというわけがなく、内閣は総辞職し、衆議院は解散、総選挙が行われた。

新内閣が発足した後も、国内の混乱は収束する気配すら見せず、日本は、滅亡を待つのみという絶望的状况におかれている。

しばらくして雲河病院に到着した多橋は、病院に隣接する青空駐車場にニリウスを置

蒼い大地

き、渋谷で購入したフルーツポンチ5個セット——娘、春江の好物の一つである——を手に、娘の病室503号室へ向かった。

トン、トン、トン。

「はい」

「父さんだ」

「どうぞ」

多橋は、ドアを開けて入室し、白いベッドへ静かに近付いて、唇を開いた。

「具合は、どうだ？」

「悪くはないわ」

と、ベッド上で半身を起こし、愛らしい顔を多橋へ向けている、春江。

1ヶ月ほど前に、ミュータント化の前駆症状を発症した中学生だ。

高性能マスクはつけていない。

前駆症状を持つ者がミュータント化をきたすまでの期間が有害化学物質の吸入量に左右されるのかは不明であるが、左右される可能性があるため、前駆症状を持つ者は、基本的には高性能マスクを着用する。

だが、優先的に高性能マスクを供給される病院においても、高性能マスクは不足しており、春江は高性能マスクをつける事ができないのである。

蒼い大地

「そうか。……母さん、高性能マスクを手に入れられなかったそうだ」
「そう。……少なくとも4ヶ月後には、私は恐ろしいミュータントね」
「馬鹿なことを言うな！ その前に必ず、父さんが、ミュータント化を防ぐ薬を開発してやる」

「期待してるわ」

期待していなさそうな顔で、春江がぼつりと言った。

「——フルーツポンチを買ってきた。食べるか？」

「いえ、今はいい。ありがとう」

「分かった。冷蔵庫にいられておくよ」

「うん」

多橋は、白い小型冷蔵庫のそばまで歩き、フルーツポンチを箱から取り出し始めた。

春江は、ミュータント特番を映す銀色の中型液晶テレビへ、視線を移している。

小粒の雨が、病室の窓ガラスを叩き始めた。

——この可愛い春江が、4ヶ月以内にあのおぞましいミュータントと化すだと……。

私には耐えられん。早く、ミュータント化抑制薬を完成させねば……。しかし、なぜ、

極秘研究所と同時に巨大粒子加速器が爆発した？ いやな予感がする。何かありそうだ

……

蒼い大地

本作品はフィクションであり、実在のいかなる個人・集団とも一切関係ありません。

蒼い大地 1

<http://p.booklog.jp/book/67413>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67413>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67413>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ